

令和6年度

第41回 公益財団法人

日本中学校体育連盟研究大会

石川大会

報告書

令和6年11月21日(木)・22日(金)

ホテル金沢

主催／(公財)日本中学校体育連盟・北信越中学校体育連盟・石川県教育委員会・金沢市教育委員会
主管／石川県中学校体育連盟
後援／スポーツ庁・全日本中学校長会・石川県小中学校長会中学校長会・金沢市中学校長会
(公財)日本教育公務員弘済会石川支部



公益財団法人 日本中学校体育連盟

公益財団法人 日本中学校体育連盟シンボルマーク・中体連旗について

(公財)日本中学校体育連盟は、全国中学校体育連盟 33 年の歴史の上に立って、平成元年 2 月に発足した。それまでの輝かしい歴史を継承し、未来に向かって力強く飛躍することを願い、新たに日本中体連のシンボルマーク、並びに中体連旗を設定した。

制定年月日は、平成元年8月31日

*日本中体連は、中学生の心身の育成、体力の増強及び体育・スポーツ活動の振興を目的として活動するものである。

*日本中体連は、国際理解教育の一環として中学校の体育・スポーツ活動を通して、国際交流を推進するものである。

この基本理念を基に「明るく希望にもえ躍動する姿」をイメージし、全国都道府県中体連と9つのブロック中体連の連帯を表し、Nippon Junior High School Physical Culture Associationの頭文字を中心に図案化した。

- ・中心の円の赤は、情熱・希望を表し、円を縁どる九輪を青（コバルトブルー）とし、未来への限りなき躍進、Nの文字には白色を配し、若人のもつ純真さを表した。
- ・中体連旗の黄色は、快活・陽気・幸福等の象徴であり、また全国中体連の歴史を引継ぐ色である。

(公財)日本中学校体育連盟憲章

- 一、体育・スポーツ活動を通して、人間尊重の精神にみち、心豊かな人間の育成に努める。
- 一、体育・スポーツ文化の継承とその進展に寄与し、生涯スポーツ活動の推進に努める。
- 一、体育・スポーツの国際交流を通して、中学生の国際理解の推進と国際スポーツの振興に努める。

第41回(公財)日本中学校体育連盟研究大会 石川大会を終えて



第41回(公財)日本中学校体育連盟研究大会

石川大会実行委員会 会長

石川県中学校体育連盟 会長

大 茂 勝

令和6年度第41回(公財)日本中学校体育連盟研究大会石川大会が、令和6年11月21日、22日の2日間にわたり、石川県金沢市にある「ホテル金沢」で開催されました。全国から約270名の中体連に関わる方々をお迎えし、「豊かなスポーツライフの実現に向けて～持続可能な運動部活動の在り方と中体連の役割～」の研究主題のもと、ご参会の皆様のご支援、ご協力もいただき、多くの成果を収め、無事に大会を終了することができました。

第1日目の講演会では、大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科の土屋裕睦教授を講師にお招きし、「NO!スポハラ～子どもたちの主体性を伸ばすグッドコーチング～」をテーマにご講演いただきました。安全・安心にスポーツを楽しめる社会作りを目指していくために、プレーヤーの主体性、生徒の心に火をつけるコーチングの重要性、そしてコーチングを行うコーチ自身のスキルアップの大切さを述べられました。その後の全体協議では、講演会に引き続き講師の土屋氏にご助言をいただき、「今後の運動部活動について」を協議題に「部活動指導を通じて、やりがいや幸せに感じたことは?」、「新しい時代にふさわしい指導者像は?」といった協議内容のもと、都道府県の垣根を越えて3～4名のグループで意見交流や協議を行い、その協議結果を全体場で交流しながら進めていきました。これからの部活動において必要な指導者像を、ご参会いただいた皆様で考え合い、その中で新たな発見もたくさんあり、有意義な時間となりました。

第2日目の分科会では、4つの研究テーマに沿って、各ブロックのパネリストがそれぞれの地域の実情などをもとに、実践してきた取組について発表しました。各都道府県が抱える課題や取組の成果を知ることができ、また質疑も活発に行われ、今後の中体連活動に生かしていける内容ばかりでした。

石川県中学校体育連盟では、本大会の開催に当たり、「石川らしさ」を前面に出しつつ、誠心誠意準備を進めてきましたが、至らない点も多々あったことと思います。この場をお借りしてお詫びを申し上げます。

令和6年元日に起こった「能登半島地震」と9月に起こった「奥能登豪雨」に関しましても、多方面より多くのご協力・ご支援、励ましのお声やお心遣いをいただきました。改めて、皆様のご協力とご理解あってこそこの研究大会であったと感じております。

結びに、本大会を開催するにあたり、(公財)日本中学校体育連盟をはじめ、北信越中学校体育連盟、石川県教育委員会、金沢市教育委員会、スポーツ庁、全日本中学校長会、石川県小中学校長会、金沢市立中学校長会並びに各関係機関の皆様方のご支援、ご協力に對しまして、心より感謝申し上げ、大会終了の挨拶といたします。

目 次

第41回（公財）日本中学校体育連盟研究大会

石川大会を終えて	1
目 次	2
基 調 報 告	3
特 別 講 演	4
全 体 協 議	6
第1分科会	9
第2分科会	15
第3分科会	20
第4分科会	27
大会スナップ集	33
大会参加数一覧表	41
編 集 後 記	42

基 調 報 告

第41回（公財）日本中学校体育連盟研究大会
石川大会実行委員会 会長

大 茂 勝

長年にわたり、学校教育の一環として位置付けられてきた学校部活動ですが、部活動の地域移行や地域クラブ活動の参加による大会運営、少子化による生徒数・活動人数の減少、教職員の働き方改革に関連した動き等の影響を受け、従前の活動を行ったり、学校単位での改革を行ったりすることは困難になってきている状況です。

このような課題を解決するべく、（公財）日本中学校体育連盟は、全国中学校体育大会の在り方を見直し、令和6年6月に持続可能な全国中学校体育大会の運営に向けての方向性を示しました。今後、生徒の大切な成長の場となっている部活動を支え、適切な大会運営の在り方等を各都道府県で慎重に議論を重ね、生徒にとって望ましい部活動の環境を整えていくことがより一層大切になると考えます。

本連盟は来年70周年を迎えます。これまでの大会や部活動を通して、全国の多くの中学生たちの心身の健全な発達に携わってまいりました。研究大会も第41回を迎え、今年で4年目となる研究主題の「豊かなスポーツライフの実現に向けて」に基づき、日頃の実践的な研究成果の発表や、研究協議・情報交換を行うことで、専門的知見を高め、各都道府県で交流を深めることで、先に述べた課題に対し、全国一丸となった取り組みが実践できる研究大会にしたいと考えております。そのため、石川大会では、参加者がより多くの意見を交わし合えるワークショップ形式も取り入れました。

また、1日目の講演と全体協議を受けて、2日目の分科会では各都道府県の取組や実践事例を交換し、より深く議論を重ね、今後の運動部活動の在り方について中学校体育連盟に加盟する皆様との充実した研究協議の場にしたいと考えております。

結びに、本研究大会が、全国からご参加いただく皆様のお力添えのもと、（公財）日本中学校体育連盟の発展はもとより、運動部活動に携わる全国各地の皆様の躍進につながることを祈念いたしまして、基調報告とさせていただきます。

《講 演》

【演題】

NO!スポハラ

～子どもたちの主体性を伸ばすグッドコーチング～

【講師】

土屋 裕睦 (つちや ひろのぶ)

【プロフィール】

■略歴:

大阪体育大学大学院教授、博士(体育科学)。1964年岐阜県生まれ。筑波大学大学院修了後、復旦大学へ留学。帰国後、筑波大学文部技官、助手を経て現職。プロスポーツチームや日本代表チームにてメンタルトレーニング指導を担当する傍ら、公認コーチ育成事業にも尽力。専門はスポーツ心理学、スポーツカウンセリング、メンタルトレーニング。

■社会的活動:

日本スポーツ心理学会理事長、日本体育・スポーツ・健康学会監事。文部科学省「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議」委員、日本オリンピック委員会アントラージュ部会員・科学サポート部門員、日本スポーツ協会「NO!スポハラ」実行委員。地域では教育委員や部活動のあり方に関する有識者会議委員等を務めています。

■著書・受賞歴:

「実践!グッドコーチング:ジュニア指導編」、「スポーツメンタルトレーニング教本-三訂版」等、多数。チームビルディングの実践研究にて日本スポーツ心理学会賞、選手の燃え尽き予防の研究にて日本体育学会奨励賞、カウンセリング心理学の研究にて日本カウンセリング学会松原記念賞を受賞。

■資格:

公認心理師。スポーツメンタルトレーニング上級指導士。
日本スポーツ協会コーチデベロッパー兼コーチトレーナー。
趣味は剣道(七段)、特技は中国語(HSK 最上級)。



特別講演

『NO！スポハラ

～子どもたちの主体性を伸ばすグッドコーチング～』

大阪体育大学大学院

教授 土屋 裕睦 氏



コーチングの新たな潮流である「No！スポハラ」という言葉をご存じだろうか？暴力行為根絶宣言から10年が経ち、今やNo！スポハラ活動が始まっている。昔は「愛のムチ」として暴力が許容された時代もあったが、今、新しい時代にふさわしいコーチングへのアップデートが求められている。

ティーチングとコーチングの違いについては、私たち教師はティーチングのプロであり、指導方法が確立されている。一方で、コーチングは部活動で頻繁に使われるが、その違いを明確に理解しなければならない。ティーチングは「やってみせ、言って聞かせてさせてみて、褒めてやらねば人は動かじ」に代表されるものであり、コーチングは「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば人は育たず」と言われるものである。スポーツ環境は学校運動部の地域移行など大きく変化しており、そのためコーチ育成カリキュラムの全面的な改正が行われ、スポーツ指導（コーチング）の新しい潮流が生まれている。

指導者は学びほぐし（unlearn）をしながら学び続けなければならない、学びを止めたら教えることはできないという意識を持ち続けることが大切である。部活動においては、生徒の主体性をどれだけ重視できるかが問われている。そのため、指導者にはインプットだけでなくアウトプット（学び合いや気づき合い）が重要であり、自分の指導方法を絶えず見直し、自己に気づき自己成長を続ける必要がある。それがコーチとしての資質向上につながるのである。

指導者からのスポハラは相当改善された傾向にあるが、まだ完全に根絶されたわけではない。体罰や暴言がなくなる理由是指導者の勉強不足やスキル不足、認識不足によるものが多い。例えば「愛のムチ」について、学校の先生はアウトと考える一方、一般の人々の中には未だに許されると考える者もいる。教員免許を持った教師が指導する部活動は、今後は地域の部活動指導員が担うことになる。これに伴い、部活動指導員には、これまでの自身の経験に基づく指導法だけでは不十分であり、講習会などによる指導方法の刷新が必要となる。

日本が国際的に見てチームスポーツに強い理由の一つには、中学校の部活動で培われる経験（あいさつや履物を揃えることなど）がある。しかし、2013年にはスポーツ界が暴力問題に直面し、高校バスケット部員の自死や女子ナショナルチームでのハラスメントが取り沙汰された。また、暴力・ハラスメント事案の通報件数は増加しており、その多くが言葉による暴力である。日本のコーチのほとんどはグッドコーチであるが、罰を与えて指導するのは体罰と同じである。法律違反だからやめるのではなく、社会規範として「こうなって欲しい」に寄り添うことが求められている。そのためにはプレーヤーの主体性を尊重することが重要であり、内発的動機づけを高める指導が求められる。部活動においても、生徒は自律性、有能性、関係性という基本的心理欲求が満たされることで内発的動機が高まると考えられる。

良い指導者は、プレーヤーを観察し、適切に指示を出し、質問を通じてプレーヤーの考え方を理解するスキルを持っている。体罰や暴言はスポーツ指導において許されるべきではない。指導者は自身の指導方法を見直し、プレーヤーの主体性を尊重する新しいコーチング方法を取り入れる必要がある。

全 体 協 議

協 議 題

『今後の運動部活動について』

協議内容①

「部活動指導を通じて、やりがいや幸せに感じたことは？」

協議内容②

「新しい時代にふさわしい指導者像は？」

協議内容①

「部活動指導を通じて、やりがいや幸せに感じたことは？」

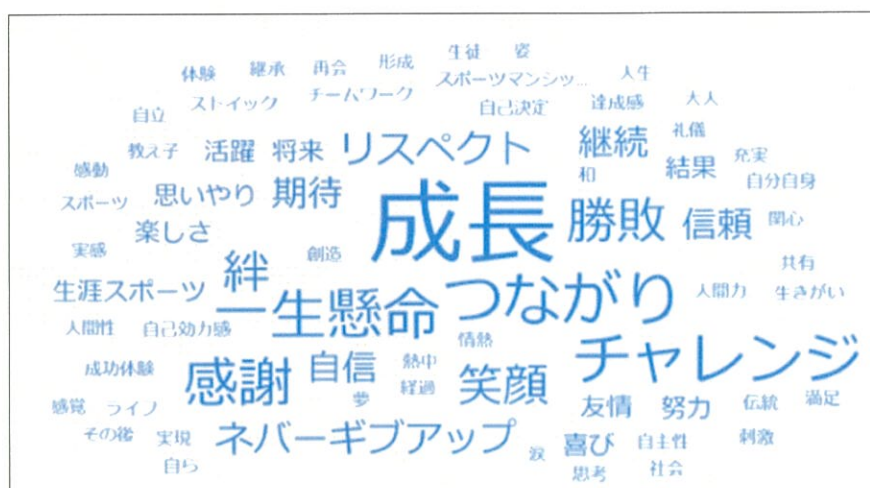
○テキストマイニングの結果を受けての土屋教授からの助言

1つ目は、話している会場の雰囲気が和やかで良いですね。これは人間関係のスキルです。例えば、「こちらが微笑まないと鏡は微笑まない」という言葉があります。指導者が笑顔でないと、笑顔になりません。いつも怒っている人に話しぶらいものです。こちらが先に微笑まないと鏡と同じで、生徒は微笑まないので。最低限、こちらが笑顔でないと話しやすい関係作りが難しいものです。

2つ目は、感謝という言葉について考えてみましょう。もし『皆さんは今、「幸せ」か「不幸」かのどちらですか』と聞かれたらどう答えますか。圧倒的に幸せが多数ですね。ちなみに、私も「幸せ」です。でも、もし神様が運を半分ずつ分けたのであれば、半分の人が「幸せ」で半分の人が「不幸」になったはずですが、ほぼこの会場の皆さんは「幸せ」だと感じています。不思議ですね。なお、自分が「幸せ」だと感じている人は、自分の周りも「幸せ」であると

感じていることが多いです。結果的にその人の周りにはラッキーが増えるということもあります。そしてその人たちには1つの特徴があります。「ありがとう」という感謝の気持ちが言える人たちであります。ちなみに「ありがとう」の反対は、「当たり前」です。「当たり前」だと思っている人は、「ありがとう」という言葉がでないのです。何事にも「有難い」と感じることから「幸せ」が始まるのです。このことは、生徒たちとも分かち合いたいですね。

最後に、テキストマイニングで出てきているキーワードで「成長」とか「勝敗」、「つながり」や「チャレンジ」ですが、やっぱりなんだかんと言って、皆さんは最終的には子どもたちの主体性とか成長とかを大事にしようと考えているんですね。発育発達論では、発育というのは、栄養と休養があれば成長できます。でも、発達はそれを促さないと発達しないです。つまり私たち教員が促すプログラム、教育活動の体験が大切なのです。発達を促すことは大変なことなのですが、部活動のいろんな所に散りばめられているはず。以上から、中学生の心と体を発達させてあげたいという思いが、このテキストマイニングのマップに散りばめられていると拝見しました。



↑協議内容①「部活動指導を通じて、やりがいや幸せに感じたことは？」
のテキストマイニング

協議内容②

「新しい時代にふさわしい指導者像は？」

○質疑・協議内容

【宮崎県 外園 武志】

◆グループ協議で出たキーワード：「傾聴」

聴く力、そこから質問する力など、生徒や保護者などから、いろんな意見を聞いて、それを指導に生かしていくことが大事なのではないかということで「傾聴」というキーワードになりました。

【土屋教授 助言】

気を利かせて「聴く」こと、相手が最後まで安心して話せるようにすることに効果がありますね。

【静岡県 竹内 哲雄】

◆グループ協議で出たキーワード：「人間性」

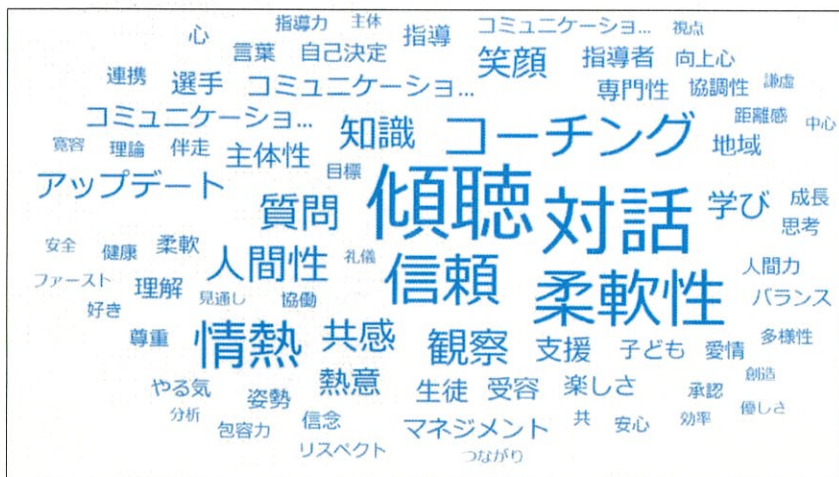
教える立場に立つ者に人間性がなければ生徒は対話してくれない。土台として指導者が人間性を高めていくことが必要。そうすることで信頼関係が構築され、指導者側の高い要求にも達成しようと努力してくれる。

【土屋教授 助言】

この拍手は共感の拍手ですね。子どもたちの人間性を育てるためには、私たち教師側の人間性・人間力を高めていくことが大事ですね。

○全体を通して土屋教授より

指導者の「幸せ」、最近はこの「幸せ」のことを「ウェルビーイング」(PERMA：持続可能な幸福)と言い、『どのようなコーチング活動を行うことが、関係する皆の「幸福」にどうつながるか』が今問われていることであります。それを踏まえると、新しい時代にふさわしい指導者像とはどのようなものか。それは「人間力」と「知識・技能」であります。「人間力」とは一体何かと言うと、思考・判断・表現、理念・哲学のようなものです。「何のためにスポーツをするのか」と言うことです。私たちの指導理念・哲学のどこを高めるか、これには正解はありませんが、一緒に考え続けることが、グッドコーチングであります。これとこれができれば良いではなくて、もっと良い方法がないか、皆が考え続けることができることが「人間力」であり、教師が自分自身を高めていくことで、子どもたちの「人間力」も育つのであります。「知識・技能」も上手になるために大事ですが、まず思考・判断・表現という、指導の中核をなす理念や哲学があり、次に態度や行動といった対人スキルを基として、指導に関わる専門スキルの知識・技能へとつながってくることとなります。中核である「私たちは何のために教師として子どもたちと関わるのか」がないと、独りよがりな指導になってしまう危険があります。



↑ 協議内容②「新しい時代にふさわしい指導者像は？」

のテキストマイニング



第 1 分 科 会

会場 ホテル金沢
2階 「ダイヤモンドB」

分科会テーマ

「中体連の組織及び競技会の在り方とその運営」

研究発表

- ◆ 須 永 侑 樹 静岡県中学校体育連盟 調査研究委員
静岡市立長田南中学校

「静岡県中学校体育連盟の組織と運営」
～地域クラブ活動の大会参加と静岡県中体連の組織改革の取り組みを通して～

- ◆ 熱 海 俊 和 山形県中学校体育連盟 研修推進委員
長井市立長井南中学校
高 橋 栄 介 南陽市教育委員会指導主事

「地域の実態に応じた中体連組織の再編」
～『置賜はひとつ!』単位中体連を超えた組織による大会運営と今後の展望～

紙上発表

- ◆ 赤 羽 徹 郎 長野県中学校体育連盟 研究部専門委員長
松本市立筑摩野中学校

「中体連の組織及び競技会の在り方とその運営」
～長野県中学校体育連盟の取り組みと課題～

第1分科会

第1分科会 テーマ

「中体連の組織及び競技会の在り方とその運営」

【指導助言者】

(公財) 日本中学校体育連盟 副会長 金子 哲朗
長野県中学校体育連盟 会長 小笠原 重光

【司会者】

長野県中学校体育連盟 副会長 畠山 正幸

【運営責任者】

石川大会実行委員会 副会長 山下 悟

【提案内容】

①「静岡県中学校体育連盟の組織と運営」

～地域クラブ活動の大会参加と静岡県中体連の組織改革の取り組みを通して～

静岡県中学校体育連盟 調査研究委員
静岡市立長田南中学校 須永 侑樹

○提案趣旨

令和5年度から地域クラブの中体連大会参加がスタートした。静岡県は前年度中から静岡県版マニュアルを作成する等して準備を整え、令和5年度大会を迎えた。令和5年度、6年度と2回の大会参加の運営を通して7年度大会の参加規程の見直しを行っている。また、令和6年6月18日に発表された令和9年度以降の全国大会縮小の動きを受け、静岡県中体連は今後の在り方委員会を立ち上げ、今後の方向性を模索している。令和9年度近畿全中大会を新たなスタートとして、静岡県中学校体育連盟の様々な組織や大会運営を見直している。

静岡県においては課題が山積しているが、いくつかの課題解決に向けた取り組みを通して、今後の中体連組織の在り方と大会運営について検討する。

②「地域の実態に応じた中体連組織の再編」

～『置賜はひとつ!』単位中体連を超えた組織による大会運営と

今後の展望～

山形県中学校体育連盟 研修推進委員
長井市立長井南中学校 熱海 俊和
南陽市教育委員会指導主事
高橋 栄介

○提案趣旨

山形県中学校体育連盟(以下、山形県中体連)には、県内11地区からなる単位地区中体連(以下、単位中体連)が加盟しており、各単位中体連及び専門部が主体的に中体連主催大会の大会運営などの役割を担っている。しかし、近年、単位中体連それぞれに課題が生じているため、単独での大会運営が困難な状況にある。

本研究は、長きにわたって地区を越え協力体制を構築している事例を基に、有用性と課題を整理し、現在進められている部活動改革との関連を踏まえながら、持続可能な中体連組織と運営のあり方について今後の展望を考える機会の一助とすべく提案する。

③紙上発表

「中体連の組織及び競技会の在り方とその運営」

～長野県中学校体育連盟の取り組みと課題～

長野県中学校体育連盟 研究部専門委員長
松本市立筑摩野中学校 赤羽 徹郎

○提案趣旨

本連盟は、全国中学校体育大会の参加資格に基づき、中体連主催大会の参加範囲が広がることを周知してきた。また、部活動の地域移行の伴い、合同チームや拠点校部活動、地域クラブ活動など多様な形での大会参加が増え、課題が山積している。

今回は、本県の地域移行の現状と本連盟の取り組みを示し、中体連の組織及び競技会の在り方に関して検討する一助としたい。

○質疑・協議内容

【長野県 赤羽 徹郎】

部活動の理念とクラブの理念があり、クラブについては勝利至上主義といった側面もあると思うが、参加についてフィルターなどはあるか伺いたい。

【長野県 水落 洋平】

令和５年度、６年度の団体参加について、特にバスケットボールクラブ、陸上競技種目のリレー、駅伝の大会参加について、要望や課題、現状を教えていただきたい。

【静岡県 パネリスト】

クラブ参加のフィルターについては加盟規定、注意事項をまとめてある。ホームページに記載し、そちらに賛同いただくようにしている。また、参加に当たっては、ガイドラインや定期的な活動などの条件を設けている。クラブの申し出を信頼して行っているが、問い合わせで抗議が入ってくるケースもある。

バスケットボールクラブの参加数については本県では現在０である。令和７年度は引き続き０であると考えられるが、令和８年度からはクラブチームの参加があると考えられる。地域移行については市町の教育委員会に事務局や競技部の方で確認し、認めていただくことで参加できるようになっている。リレーや駅伝については昨年度１０弱参加が認められた。

【京都府 岸本 卓也】

熱中症対策で野球の時間を夕方１７時からに変更していたが、勤務時間の変更については働き方改革の中ではハードルが高いと感じたが、行政との議論する中で、ご苦労等あれば教えていただきたい。

【静岡県 パネリスト】

静岡県の教育委員会は協力的であり、中学校体育連盟と協力して課題に当たっていただい

おり、健康体育課へ課題を出すことで比較的スムーズに対応していただいている。政令指定都市の浜松市、静岡市についても同様である。

【島根県 泉 祐司】

島根県も同じようにブロック大会という、県総体につながる前の大会を行っている。その中で、生徒数、部活動数に合わせてブロックごとに、県総体出場の数进行调整しているが、近年想像以上にクラブチームの参加が増えてきている。静岡県でのクラブ支部大会の運営方法、資金の調達について教えていただきたい。

【静岡県 パネリスト】

クラブ支部大会については基本的にはクラブの人たちがすべて運営している。申込みの段階では、こちらで参加数等を把握するが、提出書類はクラブ長に出してもらっており、資金面もクラブで集金してもらうなど、全て管理してもらっている。１年目、２年目ということもあり、体育館の融通など協力しながら進めている。参加が少ない競技は問題ないが、例えば、柔道やバドミントンなど出場が多い競技などはこちらからも審判を出したり、協会に依頼したりしながら運営している。

【香川県 小前 宏彰】

本県でも令和９年度の全国大会の在り方を検討する必要があるという話が出ている。静岡県では在り方委員会が発足されていたが、在り方委員会のメンバー、令和９年度からの競技部の意向、東海地区の考えがあれば教えていただきたい。

【静岡県 パネリスト】

メンバーについては中体連から県の会長、副会長、理事長、支部の理事長、事務局長合わせて１０人程度で行っている。競技部の先生を呼ぶこともあり、また今後は県教委を入れることも考えている。在り方委員会に出たことを県の

評議員会に提案、報告を行い、会議で決めていただいております。来年度も5回の実施を計画している。

東海地区の考え方については、協力しながら東海の理事長、会長でまとめている。全中縮小に向けてわれわれも対応しており、県も全中東海の意向を尊重しながら、競技部に関しても減るものもあると思う。部活動はないが運営が必要なものもあり、そういった部活動は県部長もいないため、他の部活動の先生が県部長を担当しているものもあり、実施を含めて方向性については、評議員会を通じて検討が必要かと思っています。

【長崎県 山村 利行】

ナイター開催について、ナイターで練習をした学校があれば教えていただきたい、また、ナイター練習の際の注意など、どのように対応したか教えていただきたい。

【静岡県 パネリスト】

ナイター練習については本県でも他競技から意見があった。練習について、特に制限は設けておらず、資金の補助なども行っていない。球場をとってナイター練習をしている学校は現在聞いたことはない。

【徳島県 敷田 浩一郎】

徳島県では16の郡市で県大会予選を行っていたが、生徒数減少により2年前から県内6ブロックに分けて県総体の予選を行っている。しかし、山間部を中心に生徒数が減少しており、ブロックの見直しを検討している。今後どのような方向性にもって行くかが難しく、全県一斉開催の検討など課題は多い。山形県においても今後の見通しがあれば教えていただきたい。

【山形県 パネリスト】

実際話題になることはあるが、それぞれの中体連の意見をまとめるのが難しいため、それぞれの地域の中体連を生かしながら大会運営を模索している。今後、チームが減少していく中で、検討は必要になると思う。

【徳島県 敷田 浩一郎】

県の規模、人口は少ないので他県より小回りにはきくと思うが、地区ごとに事務局を置いて、管理が必要になると思う。規模が大きくなると、会費、生徒の移動、市町にいただく後援など検討は必要になると思う。

【静岡県 パネリスト】

支部を合わせて試合をするとすると、代表チームを選ぶことに課題がある。支部を勝ち上がったチームを代表として県大会に出場させると出場地区が偏る可能性もある。各地区で県大会という目標を抱かせたいという思いもあり難しい。

【三重県 奥山 真司】

山形県の法令外負担金とはどれくらいで、生徒数で増減はあるのか。また別になるが、球場や芝生のグラウンドなどの場所、風の有無によって変動がある中で、WBGTの値だけで運営すると難しいと思うが、運営でなにか基準にしていることはあるか。



【山形県 パネリスト】

法令外負担金については各市町村よりいただいている。金額については、県大会に対する負担金、地区の中体連にいただいている負担金など様々である。前年度の金額を超えない、という規則があり、生徒×指数でいただいております、金額は現在減少している。

【長野県 滝澤 崇】

熱中症について、長野県は標高が高いこともあり WBGT の値を超えることもなく、比較的涼しい。熱中症に対するルール整備自体はしているが現在運用はない。

【沖縄県 金城 淳】

今年度サッカー九州大会が本県で行われたが、本州より沖縄県の方が涼しいという意見が多かった。試合については給水タイムを設けるなどの工夫を行い、現在問題となっていることはあまりない。

【新潟県 山下 大輔】

新潟県では県大会の縮小も検討しており、勤務時間内での終了、参加数の削減を進めている。専門部の維持について、部活動数の減少に伴い、専門部員の確保が難しくなっている中、専門部員数を削減するのか、維持するよう努めるのか、維持の際はどのような工夫をしているのか、教えていただきたい。

【山形県 パネリスト】

本県では現在維持するよう努めている。実際、生徒数の減少などもあるため今後検討は必要になると考えられる。

【静岡県 パネリスト】

競技部の意向を確認して減らしていく意向で動いている。自分の部活動の専門部長ではないが、他の競技の県の専門部長を行うこともある。そういった場合は協会に依頼したりしながら運

営しているが、削減はこれからの運営に向けて検討が必要である。

【鹿児島県 吉岡 一徳】

静岡県の兼職兼業は、原則、自分の学校の兼職兼業を認めているのか、兼職兼業の範囲についてなにか決められているか。また、合同チームについて、学校の統廃合が決定されている場合は、人数の確保ができていないチーム同士の合同チームも認めているのか、他の都道府県でもあれば教えていただきたい。

【静岡県 パネリスト】

兼職兼業については、自分が在住する学校で認めている市町もあれば、自分が勤務している学校の地域で認めるなど市町によって様々である。

【鹿児島県 吉岡 一徳】

近隣の学校の場合、自分が勤務している学校と在住する近隣の学校で試合になるなど、トラブルがあるのではないかと思います。

【静岡県 パネリスト】

明確なルールはないが、どちらかになるよう努めていると思う。



【指導助言Ⅰ 小笠原 重光】

長野市は令和7年度の2学期より運動部活動の全面廃止を打ち上げており、その中で取り組みを続けている。静岡県が実施している除熱対策に関しては、長野県はWBGTの31を厳密に見ること、半径40kmのところでは雷鳴が発生し、ライタン君が反応した場合は大会を全部中止するという事で大会運営に当たった。屋内競技については、暑熱対策費を保護者に負担いただき、今年度から空調がある施設を使用している。

組織の改編については、地域クラブ活動については、部活動の存続の状況によって、都道府県ごとに取り組みに差がある。本県は、次第に子供の人数が減少していく中で学校の統廃合も進んでいる。本県も学校の統廃合が進む中で地域移行を考えている。本県はこの市町村の大会を一切なくし、ブロック大会から開催する、集約することで大会経費削減する、先生方の大会に関わる日数の削減、そんなことを取り組みとして行っている。地域移行について長野市は令和5年度から7年度までのタイムスケジュールが決まっており、その中で令和7年度の2学期には運動部活動がなくなると示されている。

地域移行について、長野県は当初から中体連の大会に地域クラブ活動とともに参加している。各都道府県で考え方など違うと思うが、長野県の場合は各市町村から生徒1人ずつからお金を頂き、その負担金をベースにして、運営しているため、基本的にお金を頂いている段階で全員が中体連での参加資格があるという風に判断している。その段階からそれぞれの都道府県の考え方が変わってくると感じた。



【指導助言Ⅱ 金子 哲朗】

先ほど合同チームについて質問があったが、日本中体連としても規定がある。人数不足のチーム同士の合同を認めていたのが緩和され、人数が充足されていても合同チームが作られるようになった。統合していく学校の合同チームについては例えば、東京都だとそのような事例もあった。都大会出場などの規定を第一に考える中で、認めている。

静岡県の発表では在り方委員会の設置、そこでの議論をもとに進めていくということだった。その中で基本的に日本中体連は地域クラブ活動を特例として認めているというのが前提である。合同チーム、拠点校チームを認めていく中で、特例として地域クラブ活動の参入を認めている。そのため、まずは学校主体、地域の部活動に参加させながら、地域のクラブ活動にどのように参加させていくかを考える必要がある。東京都については地域クラブ活動にも枠を与え、その枠をクラブ活動内で大会をして、代表を選出するようにしている。

確立された理念のもと生徒を育てているクラブチームでないと参加を認めない、という理念のもとクラブチームから費用を徴収している。全中の競技について考え方の根本は、部活動は入学から3年間基本的に指導するのが学校としての基本であり、子どものためを思えば3年間の期間は必要となるため、見直しについては3年間から4年間の期間を経て考えてほしい。その都度変えるのではなく期間を設けて検討が必要である。

山形県については、合同で大会を運営する中、資金面、運営面、子どもの参加状況などよくなっている印象を受けた。この事例が成功となれば、全国に方法を広め、共有して進めていければと思う。

テーマに際しては子どもたちの夢と希望の実現目標の達成に向けて、そのような場面の提供が求められる。その目標達成のため、今後も運営の工夫を行って行くべきであると考えている。

第 2 分 科 会

会場 ホテル金沢
2階 「ダイヤモンドC」

分科会テーマ

「豊かな心と健やかな体を育む運動部活動」

研究発表

- ◆ 中 村 拓 人 北海道・留萌地方中学校体育文化連盟 事務局
増毛町立増毛中学校
- 山 形 大 介 北海道・留萌地方中学校体育文化連盟 事務局
増毛町立増毛中学校

「過疎化地域における地域移行の諸課題について」
～「豊かな心」と「健やかな体」を目指して～

- ◆ 上 杉 謙 太 鳥取県中学校体育連盟 研究部
米子市立後藤ヶ丘中学校
- 上 坂 誠 鳥取県中学校体育連盟 研究部
境港市立第一中学校

「競技力向上や健康体力の保持増進を目指した運動部活動」
～冬場の運動部活動の現状と課題～

紙上発表

- ◆ 渡 邊 譲 新潟県中学校体育連盟 研修部長
新潟市立金津中学校

「豊かな心と健やかな体を育む運動部活動の推進」
～スポーツマンシップ教育の推進とスポーツ障害予防の実践をとおして～

第2分科会

第2分科会 テーマ

「豊かな心と健やかな体を育む運動部活動」

【指導助言者】

(公財)日本中学校体育連盟 副会長 五十嵐 守男
新潟県中学校体育連盟 副会長 金山 光宏

【司会者】

新潟県中学校体育連盟 副会長 伊藤 法生

【運営責任者】

石川大会実行委員会 副会長 宮下 裕樹

【提案内容】

①「過疎化地域における地域移行の諸課題に

ついて」～「豊かな心」と「健やかな体」を目指して～

北海道・留萌地方中学校体育文化連盟 事務局
増毛町立増毛中学校 中村 拓人
山形 大介

○提案趣旨

令和5年度より、地域クラブ活動（以下、地域クラブ）の中体連大会への参加が特例として認められた中で、各種目の大会が開催された。その反省の中で、地域クラブによっては、勝利至上主義的な活動や過度な練習に陥る懸念があることが指摘された。

本稿では、北海道留萌管内の実情と今後の展望を通して学校運動部活動（以下、学校部活動）と地域クラブが共に子どもたちの「豊かな心」と「健やかな体」を育成するための課題を提起したい。



②「競技力向上や健康体力の保持増進を目指した運動部活動」～冬場の運動部活動の現状と課題～

鳥取県中学校体育連盟 研究部

米子市立後藤ヶ丘中学校 上杉 謙太

境港市立第一中学校 上坂 誠

○提案趣旨

本県においては、競技力向上と健康体力の保持増進に加え、心身共に健全な生徒の育成を目指し活動を行っているが、生徒数、更には部活動数（チーム数）の減少に伴い、活動に課題が生じている学校も多い。

そこで本連盟では、日没や天候等によって活動時間や活動場所が減少する「冬場の運動部活動」に着目し、実態把握や各校の取り組みの調査を行うことで、より効果的に部活動を行う方法を模索することや、部活動の地域移行や教員の働き方改革が進む中で、生徒の心身の成長に大きく影響する部活動を効率的に継続していくことはできないかと考え研究を行った。今回の調査結果から、鳥取県の実態を紹介するとともに、分科会当日には各県が取組が共有され、今後の活動につながっていくことを期待する。

③紙上発表

「豊かな心と健やかな体を育む運動部活動の推進」～スポーツマンシップ教育の推進とスポーツ障害予防の実践をとおして～

新潟県中学校体育連盟 研修部長

新潟市立金津中学校 渡邊 譲

○提案趣旨

新潟県中学校体育連盟（以下当中体連）は、毎年、活動の重点と努力事項を掲げ、全県一丸となってその達成に向けて取り組んでいる。

本稿では、当中体連の重点の一つである「望ましい運動部活動の推進」に関わり、「学校教育活動の一環としての持続可能な部活動のあり方」「運動部活動による資質能力の育成」「スポーツ障害の防止」を図るため取り組んできたスポーツマンシップ教育の推進とスポーツ障害の防止に向けた実践を紹介し、提案を行う。

○質疑・協議内容

【新潟県 渡邊 譲】

北海道の過疎化・少子化が進んでいる地域はどれくらいあるのか。またクラブチームは、どの競技があるのか。

【北海道 パネリスト】

北海道全域に渡って少子化が進んでいる。札幌市周辺や旭川などの大都市の中でも少子化が進み、小規模校になっている事例もあると思われる。クラブチームは4チームがあり、男女バスケットボール、野球、男子バレーボールを登録している。

【新潟県 渡邊 譲】

北海道における地域移行の最終的なゴール地点をどのようにイメージしているか。

【北海道 パネリスト】

過疎化・少子化だけでなく、大会運営を誰が主導して行うのか、運営費をどう捻出するのか、など問題は多岐に渡っており、全部を包括したゴールを答えることはできない。ただ、地域移行は北海道全体ではなく、それぞれの自治体が主導で行われることが多い。北海道の研究大会で各地域の情報交換が行われたところである。

【新潟県 渡邊 譲】

日没が早くなると活動時間が短くなると思うが、鳥取県の発表の中にあった学校の冬季の活動時間はどうなっているか。

【鳥取県 パネリスト】

冬の活動時間は米子市では17時までという学校が多い。終わりの会が終了後1時間程度。郡部の町バスで登下校している学校の場合は年間を通じて19時までというところもある。

【新潟県 渡邊 譲】

鳥取県の発表の中で、スイミングの練習を複

数の学校が合同で行うと言っていたが、合同でやる上で、ミーティングや練習メニュー、施設の使用料などはどうしているのか。

【鳥取県 パネリスト】

水泳経験のある顧問がローテーションを組み、指導を行っている。米子市の場合は、減免の申請で、中学生であれば施設の使用料は無料で使わせていただいている。将来的には水泳協会の指導者にも入ってもらいたい。

【秋田県 保泉 裕也】

北海道では、地域の協会やクラブの指導者が中体連の専門委員に入っているか。

【北海道 パネリスト】

全てを把握しているわけではないが、多くは教員が中体連の仕事を担っている。ただ、令和7年度、8年度に完全に地域移行する予定の自治体では、中体連の組織にクラブ指導者に入ってもらおうという話は聞いている。

【秋田県 保泉 裕也】

鳥取県の水泳の合同練習について、委任状や保険のシステムは他の部活動でも応用可能か。

【鳥取県 パネリスト】

水泳の合同練習システムは野球部が先行して行っていたものをモデルにした。心配していたのは怪我をした場合の責任の所在であったが、各学校の校長から委任状が出て、指導を委託するという契約になっており、スポーツ保険の会社にも確認をとっている。保護者からの承諾書もとっている。また合同練習に参加する顧問でLINEグループを作り、欠席連絡を行っている。



【愛知県 神谷 宜欣】

愛知県では、例えば平日はサッカー部で、土日は地域のスイミングクラブで活動しているというような生徒がいる。その生徒は練習試合ができない。でも大会は開催される。という状況がある。

また、部活動を廃部にする学校が増えていく中、大会は存続しているので、運営するメンバーが不足している。地域クラブに運営を委託したいが、平日に大会がある場合は引き受けてもらえない。このような問題に他の都道府県ではどうしているか。

【新潟県 伊藤 法生】

新潟県の長岡市の中学校の先生方にアンケートをしたところ、地域クラブのコーチになりたいという先生は全体の15%でした。顧問の先生がそのまま地域のクラブのコーチになるような流れがあるといいかもしれない。

【鹿児島県 小松 将大】

経営が難しくなり、なくなってしまうクラブもある。その場合、学校に戻りたくても学校にはもう部がない。このような問題が起きたときの対応について聞きたい。

また、県大会に出られる枠数が多い地区を選んでコロコロと所属地域を変えるクラブも存在する。クラブの方々を集めて地域移行の趣旨を説明しているはずだが、そのときの反応はどのようなものだったか。

【北海道 パネリスト】

「クラブチームと学校の部活動の合同チームはできないか」という問い合わせがあった。現行のルールではできないと答え、「では学校に戻せないか」という話になったが、自治体も入って地域移行へと進めている最中であり、教員の指導体制が整わないので難しいと返答した。

また、地域クラブの指導者を招いてミーティングをしたときは、地域移行の趣旨について理

解いただいた。危機感を抱いているのは、「学校部活動と地域クラブが対立関係になってはいけない」ということである。地域クラブの指導者の中には中体連のことや地域クラブのシステムが分からなくて困っている方もたくさんいる。ざっくばらんに話せるようなミーティングが必要だし、そのような形で実施できて良かった。ただし、コンパクトな自治体だから出来たことだとも言える。

【北海道 吉本 浩志】

鳥取県の鹿野学園での取り組みの成果や検証を教えてほしい。

また、部長会による合同トレーニングの実施に感銘を受けたが、教員はそこにどのように関わっているのか。

【鳥取県 パネリスト】

鹿野学園の成果については明確に答えられないが、義務教育学校なので、中学校に小学生がいるような状態で活動している。その特性を生かして、今後の進路に向けて指導していきたいという話は聞いている。

部長会による合同トレーニングについては、事前に練習メニューの作成会を開催し、メニューを作るところから部長が主体となってやっている。教員も協力はするが、基本的に部長、副部長が進めていく。

【兵庫県 高尾 賢司】

地域移行について、日本中体連の五十嵐先生に聞きたい。全中、日本中体連組織の存続期限について、今の段階で考えはあるか。

【日本中体連 五十嵐 守男】

後ほど、指導助言の中で答える。

【指導助言Ⅰ 金山 光宏】

部活動の地域移行は、地域によって進捗状況や背景、課題が様々であり、それらに個別具体に対応していく中で、その場その場で判断ではなく、しっかりとした教育的意義という柱を1本通してぶれることなく、新たなスポーツ環境を整えていくことが重要である。地域移行を進めていく流れの中で、合同チームが解散したり、再編成に不都合が生じたりした事例が発表されていたが、時に、大人の事情が優先され、本来真ん中に置くはずの子どもたちの存在が端っこに追いやられてしまう。生徒を真ん中において、部活動がこれまで担ってきた豊かな心と健やかな体を育むという意義や価値は、今後スポーツ、文化活動を展開する地域においても同様に柱として置いておくべきものである。

また鳥取県の発表では、冬の活動において、いかに自己の成長を実感させることができるか、または仲間との豊かな交流を組織することができるかが課題となっていた。実践紹介として、複数の部活動で展開するという組織の工夫、特別講師という外部人材の利用、栄養教諭という校内人材の活用などが示された。どの地域においても広く汎用性のある発表であった。

パリオリンピックの女子バスケットボールのヘッドコーチを務めた恩塚亨さんは、「ワクワクする気持ちが大切」と言っている。目の前の子どもたちがワクワク感をもって「やってみよう！」と思えるように指導してほしい。

【指導助言Ⅱ 五十嵐 守男】

運動部活動を教育と捉える私たちと、競技を競技として捉える競技団体との間に立ち、うまくコーディネートする媒介として中体連は存在してきた。1965年に全ての都道府県が1つになって日本中体連として走り始めて以来、ずっとその調整役を担っている。子どもたちの健康づくりをどうやっていくのかについて議論を進めているところであり、令和9年にこうして、その何年後に全中をやめるとか、日本中体連が

期限付きであるというような議論は今のところ起こっていない。

ただし、チャンピオンシップに重きを置いた全国大会は競技団体に任せて、全国の選手たちの交流の場としての全国大会を作れないかと検討を始めている競技もある。これから各競技で色々なアイデアが出てくるのではないかと考えている。

健やかな体と豊かな心について、一番大切なのは運動である。睡眠も大事、食育も大事だが、その起点になるのは運動である。適度な運動があるからお腹が空いてご飯を食べられるし、適度に疲れているから夜も眠れる。その意味で小学校を蚊帳の外に置いていては健やかな体作りは進まない。中学校マターではなく、中学校区マターにしていくべきである。

また、私達の指導において生徒の主体性が非常に重要であることは言うまでもないが、そのためには、チャレンジを高く評価する一方で、失敗に対して寛容な学校風土を、部活動あるいは教育活動全体を通して作っていかねばならない。



第 3 分 科 会

会場 ホテル金沢
4階 「エメラルドA」

分科会テーマ

「連携でつくる運動部活動」

研究発表

- ◆ 池 田 雄 幸 高知県中学校体育連盟 理事長
高知市立城北中学校

「運動部活動の現状と課題」
～地域連携・地域移行の取組を通して～

- ◆ 嶋 川 広 好 大分県中学校体育連盟 研究部員
豊後高田市立高田中学校

「ニーズに応じた地域移行に向けての取り組みについて」
～部活動統括コーディネーターと取り組む持続可能な部活動の地域移行～

紙上発表

- ◆ 廣 瀬 翔 平 富山県中学校体育連盟 研究担当委員長
富山市立興南中学校

「教員が主体となって運営する地域クラブ活動について」

第3分科会

第3分科会 テーマ

「連携でつくる運動部活動」

【指導助言者】

(公財) 日本中学校体育連盟 副会長 野口 修司
富山県中学校体育連盟 会長 櫻打 佳浩

【司会者】

富山県中学校体育連盟 副会長 鍋田 敬一

【運営責任者】

石川大会実行委員会 副会長 中田 知邦

【提案内容】

①「運動部活動の現状と課題」

～地域連携・地域移行の取組を通して～

高知県中学校体育連盟 理事長

高知市立城北中学校 池田 雄幸

○提案趣旨

高知県の現状は、生徒数の減少によって団体競技でチームが組めないことや、指導者不足による活動機会の確保が困難な状況がある。特に、中山間地域では課題が山積しており、地域連携・地域移行の取組を早急に進めることで、子ども達の活動の機会を確保すると共に、教職員の働き方改革も進めていく必要があることから、県教育委員会と連携を図り、部活動を地域連携・地域移行するための環境の整備に取り組んだ。

②「ニーズに応じた地域移行に向けての取り組みについて」

～部活動統括コーディネーターと取り組む持続可能な部活動の地域移行～

大分県中学校体育連盟 研究部員

豊後高田市立高田中学校 嶋川 広好

○提案趣旨

大分県では、令和5年度より大分県中学校体育連盟主催大会において、部活動の地域移行に伴う行政が関係する地域クラブ活動の参加を承認した。

これを受け、今回ご紹介する豊後高田市をは

じめとする県内3市において、市教育委員会に地域クラブ活動のコーディネーターを配置し、中体連・学校・地域とのパイプ役となり、連携を図りながら部活動の地域移行を模索中である。コーディネーターの役割や取組、課題を紹介することで、持続可能な運動部活動と中体連主催大会の運営について今後のより良い方向性を検討する。

③紙上発表

「教員が主体となって運営する地域クラブ活動について」

富山県中学校体育連盟 研究担当委員長

富山市立興南中学校 廣瀬 翔平

○提案趣旨

令和5年度から、日本中学校体育連盟主催で開催されている「全国中学校体育大会」に地域クラブ活動（以下：地域クラブ）が出場することが認められ、富山県でも地域クラブが富山県中学校体育連盟（以下：県中体連）主催の大会に参加することが可能となった。大会に参加したチームには、学校部活動だけではなく、教員が運営している地域クラブも参加し、上位大会に進出している。そこで、今回の発表では、教員が中心となって設立した地域クラブの活動を取り上げ、今後の運動部活動と地域との連携の在り方について模索していきたいと考える。



○質疑・協議内容

【福岡県 奥村 彰啓】

高知県の市町村をまたいだ活動における平日・休日の送迎の方法と、地域クラブの中体連への申請時期や窓口について教えていただきたい。

【高知県 パネリスト】

送迎について、各チーム、各学校、団体競技か個人競技か、拠点に来てくれるかどうかにもよるが、それぞれの状況に応じて基本的には保護者送迎で行っている。申請時期と窓口について、令和6年度に関しては、4月から受けはじめて各地区総体の申し込みに間に合うようにしてもらった。全中大会以降は随時受け付ける。窓口は、まずは各市町村教育委員会に申請してもらい、各市町村教育委員会から各地区の中体連に手続きがされるようになっている。

【福岡県 中岡 洋亮】

土佐清水市の高校との連携について、清水高校への進学者はどれくらい増えたか？他の高校でも同様の動きはあるのか。

【高知県 パネリスト】

清水高校への進学者は10人くらい。

【沖縄県 新垣 泰司】

地域クラブからの申請方法について、まず市町村教育委員会、そこから中体連への流れとなったのはどういったいきさつか。

【高知県 パネリスト】

教育委員会や地域移行検討委員会、総合型スポーツクラブの代表者などいろいろな立場の方と話をした。中体連として学校が戸惑うことがないように、まずは市町村教育委員会がどんなクラブ活動があるのかを把握する意味もあって、窓口を受けることになった。

【高知県 武田 和久】

高知県は面積のほとんどが山間地を占めており、市町村を超える拠点校活動が増えていくものと考えている。高校の存続とも関係するため、地域クラブや拠点校チームについては高知県中体連で要件をつけて規定をしている。

【富山県 藤田 慎吾】

地域クラブへの推移について、5チームから17チームとなっているが少ないように感じる。申請窓口が市町村教育委員会となっているため、申請がはじかれるなどはあるのか。

【高知県 パネリスト】

教育委員会側が申請をはじくというのは難しいと思われる。団体数が少ないのは、活動時間が中学校の部活の時間帯（16：00～）というイメージが持たれており、仕事との折り合いをつけにくいことが関係していると思われる。

【福岡県 石井 洋安】

部活動統括コーディネーターとはどのような立場の人か。また、県内に3人いるというが、県や他市の中体連との関わり方は。

【大分県 パネリスト】

部活動統括コーディネーターは中学校で教員をしていた人物が担っており、部活動を取り巻く状況も理解している。他市との関わりも多く、豊後高田との連携を進めている。

【大分県 園田 啓助】

補足として、地域クラブの申請については高知県と同じような形で、市町村教育委員会に担当者を置いている。

【福岡県 八重岡 武士】

地域クラブが発足して、新1年生の学校をまたいだ取り合いがあるのではないかと思うが、部活動統括コーディネーターがかかわることはあ

るのか。また、部活動統括コーディネーターを導入してのメリット・デメリットは。

【大分県 パネリスト】

小学校に地域クラブに関する説明をしに行ってもらっており、保護者の問い合わせにも対応してもらっている。メリットとしては大会の運営などに協力をしてもらっていることがある。デメリットとしては人数が少ないため、今後活動を維持していけるのか懸念がある。

【長崎県 濱崎 大輔】

1市1チームの実現は可能か。また、そのハードルは何か。

【大分県 パネリスト】

校区がないため、どこにも進学することができる。野球を行うために、20km先の学校に進学した者もいた。ハードルは送迎。平日はバスを出そうと考えているが、財源の問題がある。平日は教員が、休日は指導者が見るように実現してきたので、何とか実現したい。

【日本中体連 菊山 直幸】

兼職兼業に関わって、外部指導者の責任の範囲や日本スポーツ振興センターの保険適用外など、保護者にどこまで伝えられているか。また、今後中体連への加盟数が増えるのでは。高知県はどうか。

【大分県 パネリスト】

豊後高田のチャレンジクラブでは、そこから保険が出ると伝えていた。また、高校生まで医療費の負担がないこともある。部活動と同じように費用で活動できるようにしている。加盟数については、中学校の部活動がそのままスポーツ活動に変わるだけで、中身としては変わらないような取り組みで行っている。

【高知県 パネリスト】

スポーツ庁が、認める方針と聞いている。どのくらいの人が入ったかは分かっていないが、スポーツ協会の保険で対応するようにしている。また、保険料はチーム加入料に含んでいる。



【指導助言Ⅰ 櫻打 佳浩】

地域移行に関するテーマにおいて、各地域での取組や教員の負担減のため、効率的な運営が求められている。教員の負担感が増えているのは、部活動の地域移行が全国的に進むにつれ、自分の学校も早くそういった移行を進めてもらいたいという教員の願いもあるのだろうと感じる。現在は部活動が地域移行を進めている過渡期であり、高知県の取組のように市町村の枠組みを越えた合同チームや拠点校活動などと併用して中学生のスポーツ環境を整備していることは重要な視点と捉える。地域クラブにおいてはガイドラインの運用と遵守、これも日本各地で独自性がある。地域活動は、高知県では各市町の実態に応じて実現可能なところから進めているが、多様なニーズに対応できる指導者の確保や予算との兼ね合い、学校と距離がある地域における連携の問題などは、全国各地共通する部分があり、我々だけで解決はできない。やはり自治体の取り組みによるところが大きいと思う。学校現場の声、そして中体連に届けられる声を県や市町村教委に届けることが大切ではないか。

大分県は、保護者と教職員の部活動に対する意識調査、そして部活動統括コーディネーターが学校、地域をつなぐパイプ役となって地域連携・地域移行に取り組んでいる事例についての発表だった。携わりたい教員数、十数パーセントいたと思うが、この方々が地域の宝。負担の方の視点で見たが、部活動を行ないたい。ぜひこの方々に充分な手当てと保障を担保し、この宝を手放さないようにお願いしたい。学校と地域を繋ぐコーディネーターが、しかもこの方が元教員で部活動に理解のある方。こういう方がいらっしゃるのは、連携を推進して行くためには不可欠であり、様々な情報が集約されることで学校や中体連サイドのトラブルおよび負担軽減につながる。現在、豊後高田市では3競技において取り組まれているが、ゆくゆくは豊後高田チャレンジクラブへの移行を進めていくというのは理想的な形で進んでいるのではないかと

思う。ここでも予算と人の問題が大きな壁となってくることが想定されるが、中体連だけで解決できる問題ではない。ならば中体連にコーディネーター役のお願いというのも難しいと思われる。中体連として何ができるのか、そして何をすべきなのか。自分たちの立ち位置を見失わずに、関係機関との連携を図らなければならないと思う。

本分科会のテーマである「連携で作る運動部活動」は、本来であれば地域との連携。小学生年代高校生年代との連携を図りながら、学校の運動部活動をよりよいものにしていくというのが趣旨ではないかと思う。現在の課題となっている連携は地域や関係機関と連携し、部活動を地域クラブ活動へと移行していることなどが主となっている。そういうことを考えると本分科会のテーマを例えば「連携で作るより良いスポーツ環境のあり方」の方が時代に応じた、より現実的なテーマではないかと思う。その中で私たちは何ができるのか。中体連の役割について協議していけばよいのではないかと感じた。実際、今日の協議会では申請方法や、中体連の組織、地域クラブ活動ができたら組織の専門委員が減っていく。富山県においても専門家が関りそうなところも出てきている。これをどうするか？来年度からは地域クラブの方も専門部に加えていこうと言うことで、進めているところである。

【指導助言Ⅱ 野口 修司】

高知県の運動部活動の現状と課題ということで、地域連携・地域移行の取組をするという発表について、県の教育委員会と協力してアンケートを実施。やはり何か事を進めるときに大事なことは実態把握ではないかと思う。実態をもとに手立てを講じて対応していく方向に持っていくということが素晴らしかった。部活動の指導に不安を感じている教員の割合がおよそ六十数%。福岡の方でもアンケートを実施したが、同じような割合の教員が負担を感じていて、も

う部活動はあまり積極的にやりたくないと言う人の割合はおよそ 2/3 であった。実際に、私の学校でも翌年 4 月から部活動をお願いできるかというアンケートに対し約 1/3 の先生がやりまうと言っていたが、2/3 は家庭の事情でやりません、やりたくありませんという悲しい回答だった。学校内で協議をし、1 つは教育課程の見直しをして、前の年までは 6 時間授業が週に 4 日、5 時間授業が 1 日だったが、ここを帯授業も活用しながら週に 2 回 5 時間授業を作って、勤務時間の中で部活動の指導をしていたできるようにした。6 時間授業の 1 日は完全に部活動休養日、定時退校日。土日も 1 日必ず休むようにし、PTA 総会を通じて保護者の方にもご理解くださいとお願いしたところ、皆さんそれだったら自分ができることをやりますという事で引き受けてもらっている状況である。やはりアンケートを取ることによって、どう思っているのか考えているのか、どういう実態なのかを把握する必要はすごく大きいと感じている。成果としては、子どもたちの活動機会の確保ができた市町村をまたいだ取組、この部分は山間部であったり、非常に生徒数が少なかったり、部活動が成り立たなかったりする子どもたちにとっては、そこを乗り越えて活動できるのが確保される部分はすごく大きいのではないかなと思う。運動できる環境を確保しているところがすごく印象に残った。課題では、多様なニーズに対応できるよう、指導者の確保や育成をして行く。あるいは指導者への謝金、旅費の予算。受益者にかかる経費の検討、複数校合同チームと拠点校部活動の合同チーム等々ができるようになると、もっとよい。しかしながら、進めていけば進めていくほど成果も上がれば、課題も出てくる。その課題を解決するために、声を上げていただいて、運営する側、いろんな決まり事を取り決めていく側も柔軟に変えていけるように努力していくっていうことが大切じゃないかなと思う。なので、今回そういう声を上げていただいたということは、すごくいいことじゃな

いかなと思う。恐らく全国各地でも同じような状況が出ているところがたくさんだと思うので、いろんな場面について声をあげていただければと思う。

大分県の発表についても状況が特殊なところはあるが、こちらの実態の把握をしっかりとしている。連携においては市の教育委員会、中学校、中体連、そこに部活動のコーディネーターみんなで話し合っ力を合わせて決めている。教育委員会とか行政だけが先行したり、中体連ばかりが動いても、それぞれの考え方や立場等があって、なかなか進まなかったり、うまくいかないことがあると思う。検討委員会において充分連携をした上で、子どもたちにとって良い方向に進めていこうというように検討しているところが素晴らしく、参考になると思った。どの県もどの市町も同じだと思うが、財源の確保、先生方の働き方改革、大会役員の手当の問題、指導者の確保。外部の指導者や部活動指導員に任せきっているかというアンケートについて、生徒指導上の問題や部活動指導員の資質の問題などによりほぼ先生と一緒に付いているというのが現状である。指導者の確保も学校側や中体連側ばかりがやってもどうしようもない。だから、市の教育委員会等で人材バンクを作ってもらったり、働きかけを行ったりする必要があると思う。拠点校部活動では特に地方の方で、今後拠点校活動が有効になっていくのかなと考えている。

富山県の紙上発表は、教員が運営している地域クラブについて。先生方っていうのは身を挺して子どもたちのために頑張っていると思った。活動費について、現職の教員の報酬に関することや、スタッフに十分な報酬が支払われていないことが課題であるということから財源がすごく大切なところじゃないかなと思う。今後の見通しについて、令和 9 年度から全中大会 9 競技廃止が決定し、各ブロックや県で、自分のブロック大会、県大会をどうするか、いろいろと難儀しているのではないかなと思う。九州

ブロックでは全学校や保護者、生徒等にアンケートをとり、どういう風にしたいかという実態把握しようということでやり始めている。それ以降についても3年間で踏まえてその後どうするか、また話し合うということになっている。先の見通しがつかないが、そういう状況があるということをご理解いただきたい。

今後の流れについてはスポーツ庁の方で、地域展開、地域移行と言っていたが地域連携、地域展開という言い方に変わってきている。これは、部活動の良さを残していこうというところが伺えるので、中体連としても評価していいのではないと思う。スポーツ庁側で実行会議が行われている。親会とワーキンググループで話が進められている。今までは令和5、6、7年で改革推進期間というように変わった。新たに今話し合われているのは令和8、9、10年を前期、11、12、13年を後期とし、前期で休日の地域移行を進める。平日の移行を進めるのが後期というような状況で話し合いが進められている。まだ途中の段階であるため、どうなるかは見えないが、一応の目標を立てている。当初は3年間で完全地域移行と言っていたが、9年間のスパンで移行する方向に変わった。そう簡単に行くかどうかかわからないが、我々中体連、最も話し合うのが大切になってくると思う。最後に、今回連携というキーワードで発表いただいて良かったのは、十分な連携をしていること。教育委員会や中体連や中学校が。地域クラブの大会参加にあたっては様々ないきさつがあるが、担当中体連が進めてきた関係があり、それが続いている部分がある。しかし、本来中体連の大会運営をしっかりとやっていくというのが主な役割ではないかと私は思っている。条件を整理して子どもたちにとって思い出に残る良い大会を作っていこうというのが主な役割ではないかと思うが、各学校で部活動をどういうふうにしていくかという地域移行や地域展開していくことを中体連が主になっている。本来、これは各学校で行うこと。各中学校がどういうふうに進

めていくのか考えないといけないのではないかなと思う。中学校長会とか、あるいは設置者である市町の教育委員会が中心になって、中体連の大会にはこういうものがありますよ、ではそれは出られますか、出られませんか？というふうなことを話し合っていくのが筋ではないかなと思う。そのまましていても先に進まないの、同じことかもしれないが中体連が主導権を握って校長会や市町の教育委員会と話し合いをして、連携をして一緒にやっていくという方法を探っていく必要があるのではないかなと思う。



第 4 分 科 会

会場 ホテル金沢
4階 「エメラルドB」

分科会テーマ

「当面する運動部活動の諸問題」

研究発表

- ◆ 鈴木 智 喜 栃木県中学校体育連盟 副理事長
宇都宮市立姿川中学校

「組織体制を生かした指導者の資質向上を目指す取組」
～研修部と安全・危機管理部の実践を通して～

- ◆ 佐 野 将 滋賀県中学校体育連盟 参与
野洲市立野洲中学校

「学校部活動の地域クラブ活動への移行における現状と課題」
～各市町村の取り組みを通して～

紙上発表

- ◆ 江 端 達 也 福井県中学校体育連盟 理事長
福井市藤島中学校

「運動部活動の運営について」
～地域移行とのバランス・課題～

第4分科会

第4分科会 テーマ

「当面する運動部活動の諸問題」

【指導助言者】

(公財)日本中学校体育連盟 副会長 田中 節
福井県中学校体育連盟 会長 安本 桂樹

【司会者】

福井県中学校体育連盟 副会長 竹野 亨

【運営責任者】

石川大会実行委員会 副会長 西川 司

【提案内容】

①「組織体制を生かした指導者の資質向上を目指す取組」

～研修部と安全・危機管理部の実践を通して～

栃木県中学校体育連盟 副理事長

宇都宮市立姿川中学校 鈴木 智喜

○提案趣旨

日本中学校体育連盟は、保健体育科の授業及び研究、学校部活動等を通して、中学生に広くスポーツ実践の機会を与え、心身ともに健康な中学生の育成と生徒相互の親睦を目的として全国中学校体育大会を開催している。このことをふまえ、栃木県中学校体育連盟(以下県中体連)では組織体制を生かして、教員の指導力と部活動時における安全管理に関する資質・能力の向上を目指している。これまでの県中体連専門部の実践を提起させていただき、持続可能な学校運動部活動の運営につなげていきたいと考え、本主題を設定した。

②「学校部活動の地域クラブ活動への移行における現状と課題」～各市町村の取り組みを通して～

滋賀県中学校体育連盟 参与

野洲市立野洲中学校 佐野 将

○提案趣旨

令和4年12月にスポーツ庁、文化庁において、有識者会議からの提言を踏まえた「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関

する総合的なガイドライン」が策定され、令和5年～7年度を改革推進期間とし、地域の実情に応じて可能な限り早期の実現を目指すとされた。

本県においては、生徒がスポーツ・文化芸術活動に継続して親しむことができる機会を確保することを目指し、生徒にとって望ましいスポーツ・文化芸術環境を構築されるよう、市町および各学校の取組等の状況の把握に努め、課題発見・課題解決に向けた継続的な取組を行う必要があると考える。

そこで今回、本県で働く教職員が部活動に対してどのように感じているのかについてのアンケート調査を行ったところ「部活動には意義があり大切であるが、負担が大きいこと」、「少子化などにより部員数不足の学校が増えている」という意見が多数出てきた。この結果もふまえ、学校部活動の地域クラブ活動への移行に向けた各市町村の実証事業の成果と課題を元に、令和7年度末までの改革推進期間の部活動の地域移行化の在り方を検討することとした。

③紙上発表

「運動部活動の運営について」

～地域移行とのバランス・課題～

福井県中学校体育連盟 理事長

福井市藤島中学校 江端 達也

○提案趣旨

現在、教師の働き方改革や、少子化・生涯スポーツの観点から「部活動改革」が叫ばれ、部活動の地域移行に向けての取組が行われている。しかしながら、人材面、予算面を中心に、様々な問題点が浮き彫りにされ、順調とは言いがたい。令和8年度まで残り2年を切った今、永平寺町が行っていることを紹介することで、今後どのようなことができるのかを議論できればと思い、このテーマを設定した。

○質疑・協議内容

【岐阜県 今西 卓】

地域以降が進んでいく中で、大会運営が教員以外で行っていくことが増えると思うが、どのように大会を存続できるかご意見を伺いたい。

【滋賀県 パネリスト】

年間中体連として3大会主催しているが、非常に大会数が多いため運営は先生方の協力で成り立っている。しかし、このまま継続して行っていきたいという思いはある。

【宮崎県 外蘭 武志】

2つの質問があり、1つ目は、人材バンクはどこが設置しているのか。2つ目は学校が母体となる地域連携の部活を、部活動指導員を活用しながらどう進めていくのか。

【滋賀県 パネリスト】

1つ目は県の文化スポーツ部が設置している。2つ目は県全体では進んでいなく、地域によって偏りがある。まずは地域連携の強化を進めていく。

【山梨県 戸田 徳和】

2つの質問があり、1つ目は、地域クラブのあり方や進め方を生徒や保護者にどのように周知していくか。2つ目は、コーディネーターの選任と現状の動きはどうか。

【滋賀県 パネリスト】

1つ目は曖昧な方針の元動いており、周知は各市町村によって行われている。2つ目は県の中から1名来てもらっているが、人選は県の教育委員会と文化スポーツ部で行った。

【宮城県 菅原 芳樹】

クラブの方も安全危機管理を、学校の部活動と同様にやってくれているのか。

【栃木県 パネリスト】

浸透は難しいが、地区の代表者会議の挨拶の中で必ずマニュアルの話を入れる。地区を第1段階として、徹底していこうと動いている。

【司会 竹野 亨】

安全危機管理について各都道府県の工夫を情報としていただけないか。

【新潟県 阿部 修】

暑熱対策を行政から支援してもらうことで行い、連盟や協会ごとのガイドラインの確認を行った。また、種目によって理学療法士や養護教諭の配置をすることで、救急体制を整えた。

【長崎県 鶴田 和宏】

地区大会では空調の効かない施設を多く利用した。その際は看護師の要請を行うなどして対策をした。

【千葉県 大目 智志】

理事会で専門委員長を集め周知するだけでなく、事故発生時のマニュアルをプログラムに載せる。事例として、爆破予告があった際は関係各所に連絡協議の末、無観客試合の実施と手荷物検査の徹底で大会を実施した。



【司会 竹野 亨】

地域クラブの活動について各都道府県の現状を聞きたい。

【岡山県 松崎 晃】

地域によって差はあるが、山間部は行政が主体となって動いている。都心部は、現状困り感がなく、進んでいない。

【長野県 伊藤 駿太郎】

地域ごとに差が大きく、保護者や先生が立ち上げた滋賀県のような総合型地域クラブがある。令和8年度から部活動を発展的解消しようとしている。

【京都府 杉本 清彦】

拠点校方式を進めていこうとしているが、校長会で検討している地域もあるため、実践している地域があったら教えてほしい。

【静岡県 影山 ちか】

進んでいない。学校数も49と多く、兼職しながら教員が関わっている。しかし、アンケートでは2割ほどの教員しか携わることに希望していないため、指導者探しに苦慮している。

【司会 竹野 亨】

福井市は市の教育委員会が中心となって地域移行を進めている。それぞれのブロックにコーディネーターを配置し、各地域と連携しながら進めていこうとしている。学校は関わらないといったことを、永平寺町をはじめ、行っている。



【指導助言Ⅰ 安本 柱樹】

栃木県では組織体制を生かした指導者の資質・向上を目指す取り組みについての発表であった。10地区24専門部で編成されて、さらに競技専門部、研修部、安全・危機管理部の3部体制、それぞれに運営と実践を積み重ねながら、指導者の資質向上に努められていること、今回は特に研修部と安全・危機管理部の実践について詳しく発表していただいた。研修部の発表を実践では、中体連と関東中学校保健体育研究協議会との連携・結びつきが非常に強く、その多様な考え方が部活を指導にも生かされていて素晴らしいと感じた。多くの指導者や助言者の考えを融合し、個人では気が付かない課題についても、多面的・多角的に迫り、指導の幅が広げられていた。また研究報告を元に、さらに進化させ力を結集し学びを拡散することで、保健体育の授業だけでなく、運動部活動にも活用され、この学びが県全体に広げられていた。関係した団体が、お互いに連携をとっていくことは、働き方改革にもつながっていく。また、安全・危機管理部の実践では過去の教訓を生かして、痛ましい事故を二度と起こさないという決意が非常に伝わってきた。危機管理マニュアルが形式的なもので終わらないよう、大会ごとに検証を行い、課題の抽出、改善が常に図られ、より安全で安心な大会となるよう運営されていた。今年度の全中は、北信越ブロック開催で、福井県は4競技開催であった。熱中症対策には非常に大きな労力と経費を割いた。今後ますます気温が高くなる傾向があり、外部講師の研修会を行うなど、指導者自身が安全管理能力を高めていくことの必要性というのを再確認した。安全を第一に考えた栃木県の指導者の資質・向上を図る取り組みは、組織体制がしっかりされ、生かされていることは、とても素晴らしいものであった。

岐阜県の発表について、各都道府県、市区町村でも、それぞれにあった方法を模索して、苦勞されている。部活動の意義は感じているが、

同時に負担感も感じているという教員が多いのではない。少子化により、部員数・部員不足の学校が増えているのは、全国共通なのかもしれない。そのような中でも生徒たちが充実した活動もできるよう、参加しやすい環境を確保し、地域の実情に合わせた多様な受け皿を充実させるための取り組みがまとめられていた。課題として、適切な時間の設定、怪我・事故への対応、それから生徒の健康・安全面の配慮の3つ挙げられていた。3市がそれぞれの取り組みをされていたが、まず米原市は関係団体が連携して、役割分担をして持続可能な運営ができる体制の構築、活動中における事故やトラブルの対応主体を明確にするルールづくりに取り組まれていた。指導はできるが、実際には責任を負いたくないために、指導につかない、クラブをつくらないといった方も多いのではないかと考えられる中、指導者の確保にも、不安感を払拭することにつながっていく。そのためのマニュアルづくりは大変意味のある取組である。次に彦根市では、各競技ごとにコーディネーターを配置、顧問と連携を図る取組が報告されていた。競技ごとにおかれている状況が異なるため、取り組みもそれぞれの競技にあったものが大切になると考えます。コーディネーターが競技ごとに配置されているということが、スムーズな連携につながっていると感じた。保護者の負担、特に経費の面も大きいと思います。学校の集金システムを利用して参加費を集めている点、またコーディネーターが8つのクラブをまとめて管理することで金額差が出ないように調整されている点、それから備品や消耗品等の購入もバランスよく配分しているという点が非常に心に残っている。長浜市では、部活動がない競技を中心に総合型スポーツクラブが小学校から中学校まで一貫した指導をするという体制が構築されていた。特に生徒に対して指導者の数が多く、保護者と信頼関係が構築されているところも良い。また学校体育施設を利用することで、移動のリスクも軽減されている点や、卒業生が指導

者となって、次世代の育成をする体制を構築しようとすることを検討されている点も、非常に良い。

3つの課題に対し 滋賀県の3つの市の取り組みがまとめられていた。それぞれの実情に合わせたあった取組をしていくことが大切である。

【指導助言Ⅱ 田中 節】

本分科会テーマは「当面する運動部活動の諸問題」であり、部活動の地域移行も踏まえての発表であった。栃木県は「組織体制を生かした指導者の資質向上を目指す取組」という発表であった。研修部と安全・危機管理部の実践で、同じ競技の縦のつながりだけではなく、他競技の指導者の横のつながりを利用して、多面的・多角的な取り組みをされていると、それぞれの指導者の資質向上につなげていくことが研修部の役目となることが示されていた。安全・危機管理部の実践は、年3回の部会を実施され、大会前にはチェックリストを提出させて、検証を行うということであった。それぞれの研修部、安全・危機管理部の成果としては、指導者同士の連携の強化、指導者の日頃からの安全管理能力を高めて、生徒の活動を支えるということであった。私は大阪であります、前日に熱中症特別アラートが出たら大会の中止となっていました。大阪選手権、近畿大会においてもアラートが出たら大会を中止すると思えばならないという話をさせていただいた。上位の大会につながる場合、こういった順番で上に上がるのかということを考えておくことも必要である。予備日をとるのも、なかなか難しいということで、対策を考えておく必要もある。当然ながら熱中症対策には、すべての専門部に、大会前にもう一度見直し、これで大丈夫かと言うことを検討して、皆が分かる形で取り組むということをしている。栃木県の取組では、日頃から行われているということで、生徒の安全を考えていることである。滋賀県では、地域、その場所に応じた取組をなされていることがよく分かる。

米原市では昔からホッケーが盛んで、近畿大会でもホッケーの大会があるのですが、ここではマニュアル作りをして、責任の所在に対する不安感を払拭する取組が特色であると感じた。彦根市では、競技ごとにコーディネーターを配置すると、スポーツ協会の協力があつたのが特色であると感じた。口座引き落としのシステムも一つの特色である。長浜市では、総合型スポーツクラブの指導があり、今後の課題としてはコーディネーターや人材バンクを検討されている。大学生を部活動指導員または人材バンクに登録するために、どんな人物や必要な資格という質問をさせていただいた。大阪では多くの大学生が部活動指導員として登録されている。すぐに指導させるのではなく、研修があり、謝礼が支払われるのは、何回か何週間か指導した後ということで、その学生の指導歴を重視している。地域移行に関しては、スポーツ庁が部活動改革に関する実行会議の中間とりまとめの話をした。その中では、令和5年度から7年度までが改革推進期間として、令和8年度から完了を目指している。次期改革期間として、令和8年度から11年度に、その中間評価をして、令和11年度から13年度で地域展開をさせることで報道発表がありました。本来、部活動は中学校のスポーツ活動を担ってきた教員の枠を超えて教育の一環・一面ということでは重要なことだと考える。部活動が果たしてきた、中学生への行動や態度やルールを守ること、仲間のことを考えることなどの規範意識は、これからはないがしろにできないことである。地域移行から地域連携という言葉もでてきたが、部活動指導員を地域から派遣していくという動きもある。教員からは、中学生のスポーツ指導の機会がなくなっていくことはどうなのかということは、だれが中学生を教えるのかが重要なことであり、心配なことであります。すべての種目、すべての生徒が学校での部活動から離れていくことは、なかなか難しい。令和13年度になっても、これは実践できるのかということが疑問に思うが、

スポーツ庁中心にして、変えていこうということなので、この流れを見ていかなければならない。いずれにしても、生徒達に運動・部活動という関係を残すことが、我々の重要な役目であり、今回の発表でも、この役目を再確認させていただいた。



大会スナップ集

【開会行事】



《開会のことば 石川県中学校体育連盟 副会長 上森 範人》

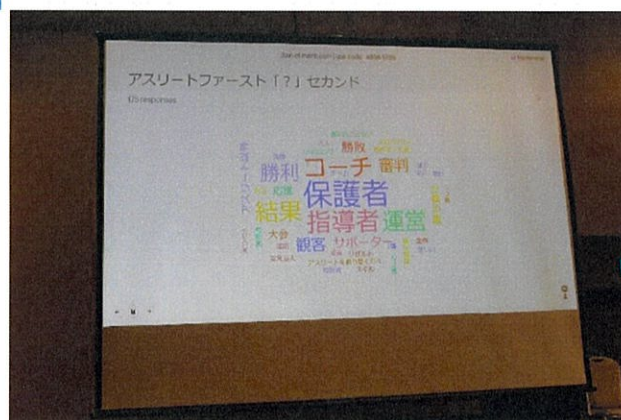


《主催者あいさつ（公財）日本中学校体育連盟 会長 青海 正》



《基調報告 石川県中学校体育連盟 会長 大茂 勝》

【特別講演】



【全体協議】



【分科会】

～第Ⅰ分科会～



AAA

地域の実態に応じた中体連組織の再編

～ 置賜はひとつ！単位中体連を越えた組織による大会運営と今後の展望 ～



山形県中学校体育連盟 研究推進委員会



長井市立長井南中学校 教諭 熱海 俊和
南陽市教育委員会 指導主事 高橋 栄介

第41回 公益財団法人日本中学校体育連盟研究大会

過疎化地域における地域移行の諸課題について
－「豊かな心」と「健やかな体」を目指して－

北海道留萌管内中学校体育連盟 事務局・調査研究担当
増毛町立増毛中学校 教諭 中村 拓人
教諭 山形 大介

令和6年度 日本中学校体育連盟研究大会

「競技力向上や健康体力の保持増進を目指した運動部活動」
～冬場の運動部活動の現状と課題～

鳥取県中学校体育連盟 研究部
研究委員 上杉 謙太
研究委員 上坂 誠



運動部活動の現状と課題

～地域連携・地域移行の取組～



ニーズに応じた地域移行に 向けての取り組み

～ 部活動総括 **コーディネーター** と取り組む持続可能な部活動の地域移行 ～

大分県豊後高田市立高田中学校
教諭 嶋川 広好

第41回 日本中学校体育連盟研究大会石川大会

組織体制を生かした指導者の資質向上を目指す取組
～研修部と安全・危機管理部の実践を通して～

栃木県中学校体育連盟 副理事長
宇都宮市立姿川中学校 鈴木 智喜

学校部活動の地域クラブ活動への
移行における現状と課題
～各市町村の取り組みを通して～

滋賀県中学校体育連盟 参与
野洲市立野洲中学校 佐野 将

【閉会行事】



《次期開催地あいさつ 愛知県中小学校体育連盟 山田 善申》

【その他】



令和6年度 第41回（公財）日本中学校体育連盟研究大会

石川大会 参加数一覧表

中体連名	参加人数	分科会				中体連名	参加人数	分科会			
		1	2	3	4			1	2	3	4
北海道	5	1	4	0	0	大阪	6	2	1	2	1
青森	4	1	1	0	2	兵庫	9	2	3	2	2
岩手	4	1	1	1	1	奈良	4	1	1	1	1
宮城	5	1	1	2	1	和歌山	3	1	1	0	1
秋田	5	1	1	2	1	鳥取	7	0	7	0	0
山形	7	4	1	1	1	島根	7	3	0	2	2
福島	6	1	1	3	1	岡山	11	2	3	3	3
茨城	4	0	0	0	4	広島	6	1	1	3	1
栃木	4	0	0	0	4	山口	5	0	2	0	3
群馬	4	0	0	4	0	徳島	3	1	0	1	1
埼玉	7	3	2	1	1	香川	8	3	3	2	0
千葉	4	0	0	2	2	高知	4	1	0	2	1
東京	2	1	1	0	0	愛媛	2	2	0	0	0
神奈川	6	2	1	1	2	福岡	6	0	0	6	0
山梨	2	1	0	0	1	佐賀	5	1	2	1	1
長野	9	6	1	1	1	熊本	1	1	0	0	0
新潟	8	2	3	1	2	長崎	10	2	2	3	3
富山	5	0	0	5	0	大分	6	1	1	3	1
福井	3	0	0	0	3	宮崎	4	1	1	1	1
静岡	10	5	1	1	3	鹿児島	2	1	1	0	0
岐阜	5	0	0	0	5	沖縄	7	1	2	2	2
愛知	17	4	4	6	3	日本	4	1	1	1	1
三重	6	1	1	3	1	中体連以外	5	0	2	2	1
滋賀	7	0	0	0	7	実行委	51	13	13	13	12
京都	5	1	2	1	1	総計	320	77	73	85	85

編 集 後 記

令和6年度第41回（公財）日本中学校体育連盟研究大会石川大会を盛会のうちに終了することができましたことを大変嬉しく思います。能登半島地震や奥能登豪雨の爪痕が未だ残る中無事に終えることができたのも、各都道府県からの多くの励ましやお心遣い、様々な御支援あつてのことだと思います。本大会を開催するにあたりまして、御多忙のところご協力いただきました多くの関係各位の皆様に、深く感謝申し上げます。

本研究大会の研究主題「豊かなスポーツライフの実現に向けて～持続可能な運動部活動の在り方と中体連の役割～」のもと、1日目に土屋裕睦氏の講演及び全体協議を行い、2日目に分科会を行いました。全国の中学校体育連盟の指導・運営に携わる関係者が一堂に会し、豊富な実践報告や成果の共有、諸課題について多角的視点から多くの議論が交わされ、実りある研究協議ができ、貴重な機会を得ることができました。

最後に、報告書の作成にあたり御協力いただきました関係各位に深く御礼申し上げます。また震災に際して温かいお言葉や御支援をいただきました全国の中体連の皆様にも深く感謝し、令和7年度の愛知大会がさらに意義深い大会になりますよう祈念いたしまして、編集後記とさせていただきます。

令和7年3月

石川大会実行委員会一同

令和6年度
第41回（公財）日本中学校体育連盟研究大会
石川大会報告書

発行年月日	令和7年3月10日
発行責任者	（公財）日本中学校体育連盟会長 青海 正 事務局 〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号 Japan Sport Olympic Square 401号室 Tel. 03-5843-1961
編 集 者	第41回（公財）日本中学校体育連盟研究大会 石川大会実行委員会

